

聖書：ピリピ 4：14～20

説教題：香ばしいかおり

日時：2017年6月11日（朝拝）

ピリピ人への手紙の最後の部分を見えています。パウロはここでピリピ教会からの贈り物に対する感謝を述べています。前回も見ましたように彼は一つのことには注意していません。それは彼らの感謝を述べるあまり、まるで自分が彼らからの贈り物を首を長くして待っていたかのように思われたり、あるいは自分の喜びが物質的なものにかかっているかのように受け取られないようにということでした。パウロはピリピ人からの贈り物に感謝していますが、彼が究極的に依存しているのは神です。その神にこそ依存し、また神に支えられている自分の信仰のあり方がいささかでも誤解されないように！とパウロは細心の注意を払っています。前回見た 10～13 節でパウロは、どんな境遇にあっても満ち足りることを私は学びましたと言いました。貧しさの中でも、豊かさの中でも、キリストにこそ信頼し、満ち足りていることができると。これが彼の信仰の基本線です。しかしだからと言って、ピリピ人たちからの贈り物は必要なかったとか、どうでも良かったというわけではもちろんありません。パウロは今のことを押さえた上で、心から彼らの愛のわざに感謝しています。そしてこの彼らの献身的な行ないが神の前でどのような意義を持つかを今日の箇所述べて行くのです。

まずパウロは 14 節で「それにしても、あなたがたは、よく私と困難を分け合ってくれました。」と言います。この「分け合う」という言葉はギリシャ語では「交わり」という言葉と「ともに」という言葉を組み合わせた言葉です。私たちはここに改めてクリスチャンの交わりについて教えられます。私たちは御言葉の学びだけではなく、もっと交わりをしたいとか、さあ交わりの時間にしましょう！と言ったりしますが、交わりとは楽しくおしゃべりする時間とか、素敵なティータイムを持つこととイコールではありません。ここで言われている交わりは、キリストのための苦しみを共にすることです。1 章 29 節：「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみを賜ったのです。」 信仰生活には必ずキリストのために苦しむという要素が含まれています。ですから私たちの交わりには、そのキリストのための苦しみを分け合うこと、担い合うことも含まれます。このようなことにパウロはキリスト者の交わりを見ているのです。

そしてパウロはピリピ人たちのこれまでの姿も思い起こしています。15 節に「マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやりとりしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。」とあります。パウロは第 2 回伝道旅行でマケドニヤ地方を訪れ、ピリピ、テサロニケ、ベレヤの町々で伝道しました。そこからさらにギリシャのアテネ、コリントへと進みました。パウロがここで思い起こしているのは、そのコリントにいた時に受けた支援だったと思われます。使徒の働き 18 章に記されていますが、パウロは初め天幕作りをしながら生計を立てていましたが、マケドニヤからシラスとテモテが下って来ると御言葉を教えることに専念しました。これはピリピ教会からの大きな支援を受けて福音伝道に専念できるようになったということなのでしょう。新改訳は 15 節で「私が福音を宣べ伝え始めたころ」と訳していますが、原文は「福音の始まりにおいて」と記されているだけです。これはピリピ人が福音を受け入れた最初の頃という意味だと思われます。つまりピリピ人たちは福音を伝えられた後、間もなくパウロへの支援を開始したのです。16 節には「テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私の乏しさを補ってくれた」とあります。テサロニケはピリピの隣町です。つまりパウロたちがピリピの町を後にし、テサロニケに行った時もピリピ人たちは支援した。1 章 5 節：「あなたがたが、最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来たことを感謝しています。」まさに最初の日から福音を広めるわざに献身して来たピリピ人たちでした。なぜ彼らはこのように行動したのでしょうか。私たちはこれを単にパウロとピリピ教会の人間的な関係が良かったからと考えてはならないと思います。これはむしろ福音がピリピ人たちにもたらした実であると見るべきでしょう。私たちがここに見るのは福音を本当に信じ、受け入れた人たちの自然な姿なのです。

ピリピ人たちはパウロを通して福音を信じ、死からいのちへ、さばきから救いへ、闇から光へ、無目的の人生から目的のある人生へ変えられました。これは福音によらずしては持つことができなかつたものです。キリストを信じる以外には与えられない祝福です。ヨハネの福音書 14 章 6 節：「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」そのことを受け止めるなら、この福音以上に大切なことは私たちの人生に他にないということになります。もちろん他にも大事なことは色々あります。私たちの生活のために色々なことも考えなくてはなりません。しかしこの福音がなければ人生はすべて意味なしと言っても過言ではありません。そのままではすべての人は最後は滅びに至ります。このこ

とを考えたら、この福音を知らせること以上に優先度の高いことは他にないこととなります。そこでピリピ人たちは福音を受け取るや否や、自分たちの置かれているところで福音のために働くと同時に、パウロのための支援も開始したのです。

私たちは自分を振り返ってどうでしょうか。今日は人の考えはそれぞれであって、キリスト教であってもあまり他人に押し付けるべきではないと言われます。もっと他人のあり方を尊重すべきと言われます。もちろん礼儀を欠いた伝道の仕方であってはならないと思います。しかしだからと言って何を信じていても、その人がそれで良いと思っ  
ているならそれで良いと考える私たちではありません。聖書から私たちが教えられていることは、救われるべき名としてはイエス・キリストの御名以外には与えられていないということです。この方を信じなければ、すべての人は自分の罪のゆえに滅びを刈り取らなくてはならない。そのことを思うなら、この福音が人々に伝えられ、宣教が前進することのために特別の関心を持ち、祈り、働き、また自分の持ち物をささげるはずではないでしょうか。私たちが福音の働きをどれだけ心にかけて、またそのために具体的にささげているかは、私たちが自分の信じていることを本当に信じているかどうかのテストとなることなのです。私たちはこのピリピ人たちの姿に福音を真に受け取った人たちの姿を見て、自らの信仰を再確認させられたいのです。

さてこのようなピリピ人たちの福音のための献身は、神の前でどんな意味を持つかについて、パウロは続けて語ります。三つのことを見て行きます。一つ目は 17 節です。パウロはそこで、私は贈り物を求めているわけではありませんと言います。そして私の欲しいのは「あなたがたの収支を償わせて余りある霊的祝福なのです」と言います。この「収支を償わせて余りある」とはどういうことでしょうか。これはピリピ人たちは確かにパウロの支援のために支出したが、結局は収入も十分に与えられて、そこに余りがついたということでしょう。つまり私たちが福音のためにささげる時、それは自分への祝福となってやがて戻って来て、かえってその人が祝福されるということです。ささげた人自身がさらに大きな恵みを受け、支出した以上の祝福を受けるということです。

このことは他の多くの箇所でも言われています。たとえばルカの福音書 16 章の不正な管理人のたとえで、不正な管理人は自分のお金を使える間に人々に寛大に施しをし、将来の友を作りました。イエス様はそのように私たちにも、間もなく使い物にならなくなる現在の富を用いて人々に施せと言っています。そうすればやがての天国でその人が

あなたを自分の家に迎え入れてくれる。つまり今ここで必要を覚えている人に愛の贈り物をするのは、自分への祝福となって帰って来るのだ！ということです。あるいはIテモテ6章17～19節でも、富んでいる人たちに対して、頼りにならない富に望みを置かず、神にこそ望みを置き、惜しまず施すようにとされています。そうすることは未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げることであり、と。つまりささげる人は結局自分のためになることをしているということです。私たちは今、自分の手にあるものをがっちり握って自分のためにだけ使っていると、それは将来に向かって減るばかりです。しかし福音のために使うと、それは自分への祝福となって帰って来る。目の前の人の必要を満たすと同時に、将来の自分に投資していることになる。神の前におけるあなたの霊的な口座預金は増やされ、かえって余りが出るとされています。パウロはピリピ人たちについてそのことを喜んでいっているのです。

二つ目は18節です。パウロはそこで「私は、すべてのものを受けて満ちあふれています。」と語っています。「エパフロデトからあなたがたの贈り物を受けたので、満ち足りています。」と。これは贅沢な状態になったということではなく、ピリピたちにこれ以上、気を使わせないための言い方でしょう。また心からの感謝を表す言い方でしょう。そしてここに注目すべき表現が出て来ます。それは「香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物」という表現です。ピリピ人たちはパウロを助けたのはありましたが、それは同時に神へのささげものであるということです。神はそれをご自身に対する香ばしいかおり、また喜ばしい供え物として受け入れてくださる。この「香ばしいかおり」また「供え物」という言葉は、どちらも旧約聖書を背景とする言葉です。たとえば創世記8章には、ノアが大洪水後に全焼のいけにえをささげた時、神はそのなだめの香りをかがれて、人類へのあわれみの約束をくださったことが記されています。もちろんこれは私たち人間に合わせた表現の仕方であって、神がいけにえの燃える匂いを好まれるということではありません。もし私たちが素敵な香りのする花の匂いを嗅いだらどんな気持ちになるのでしょうか。どんなに幸せな気持ち、心地よい気分になるのでしょうか。そのような香しいものとして、神は喜んで私たちの愛のささげものを受けてくださるのです。改めてここに覚えさせられることは、私たちが地上でささげる愛の支援は単に地上的な事柄ではないということです。それは神の前に立ち上る香り良きささげものであって、神が喜んで受けてくださるものだということです。そうであるなら、神がその喜びを私たちに豊かに表して下さらないはずがありません。

そのことが書いてある 19 節を三つ目に見ます。「また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。」ピリピ人たちはパウロを精一杯支援しましたが、それでも神が持つ富に比べたらはるかに小さなものです。ところが神は彼らのささげものをお喜びになり、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって祝福してください。また神はある必要だけでなく、すべての必要を満たすと言われていました。しかもこの「栄光の富をもって」という部分は、ギリシャ語では「栄光の富に従って」という表現になっています。すなわち神は偉大な栄光の富の中から祝福してくださいるばかりでなく、その栄光の富のスケールにふさわしい仕方でも祝福してください。神は無尽蔵の巨大な倉を持っているだけでなく、その巨大な倉から汲み出すにふさわしい巨大なカップをもって、私たちの必要を溢れるばかりに満たしてくださいるのです。このことを覚えるなら、もう心配する必要がありません。私たちはこのことを信じて、神の国とその義とをまず第一に求める生き方に自分をささげればよい。そうするなら神が必要をすべて満たしてくださいるのです。

最後 20 節でパウロは頌栄賛美をささげます。「どうか、私たちの父なる神に御栄えがとこしえにありますように。アーメン。」ピリピ人たちに働いてこのような福音の恵みに生かしている神を思い、またこうして彼らを豊かに満たし、祝福される神を見上げて、パウロはすべての栄光を神に帰しています。

私たちはこの御言葉の前でどうでしょうか。私たちは福音が一層広められるために、どのように心を用い、また自分の持てるものをささげているのでしょうか。私たちはピリピ人たちの内に、福音に生かされている人の自然な姿を見て、自らを点検したいと思います。そして私たちも同じ福音を頂いた者として、このかけがえのない福音を心から感謝している者として、これが一層宣べ伝えられることのために祈り、また関わり、また献身の現れとして持てるものをささげる者でありたいと思います。その人はそのことを通して神の前における収支がプラスにさせられます。また神ご自身がこれをご自身に対する香ばしい香りとして喜んで受け取ってください。そしてご自身の栄光の富に従って私たちの必要をすべて満たし、ご自身の御栄えが豊かに現されるという祝福の中に私たちを生かし導いてくださいるのです。